

観測部月報

Monthly Report, Observing Section, O. A. A.

★

東亞天文協會

★太陽課 SUN (1943年五月分)

こんどは報告が到着した順に此の表を並べて見た。例月の如く秋澤氏の報告が最も早かつた。しかし、總體に於いて、以前に比べると、近頃は報告の到着が大變に早くなつたことは喜ばしい。こんどは六月2日に恒岡氏までのもの、3日に竹内氏まで、4日に疋田氏までのものが到着した。

又、以前に此べると、観測日數が一帶に増し、観測者たちの熱心振りが著しく現はれて來たことは明らかである。保積氏は二月の23~24日の大黒點の描畫を送られた。

本課員諸氏には是非願ひたいのは、毎日見える黒點の經緯度を測つて頂きたいことである。勿論之には太陽面經緯度圖を用ひて、個々の黒點の位置を觀測してほしい。天文年鑑にある P (北極の位置角), B_0 (中央の緯度), L_0 (中央子午線の經度) の意味も御存じであらう。しかし、 L_0 を計算して頂かないでも宜しい。只、經緯度の線に準じて、中央から西へ何度 (例へば $+15^\circ$ 等とする), 又は東へ何度 (例へば -25° 等) と書いて貰へば宜しい。太陽面上の經度は此うした報告から必要に應じて計算します。但し、観測の時刻は、日本標準時で何時何分といふ風にして、1分以上の誤差が無いやうに願ひたい。——疋田、木邊兩氏の逸早い報告 (急報609) にもあつたやうに、いよいよ黒點の新しい系列が高緯度に出現して來た。しかし、之と同時に、今後なほ暫くは舊い系列が低緯度に見え続けるのだから、相對數も、新舊別々に計算しなければ、本格的とは言へない。又、地球への影響がマジメに問題となつて來た現狀であるから、東西への黒點の經度もちゃんと計つて置かないと、折角の観測の價値が無駄になる。

各観測者は、種々な器械と方法とを有つておられるのであるから、本課で要求する經緯度などを測り得ない人もあるか知れないが、止むを得なければ、セメテ赤道儀を有つてゐる人々だけでも、投影法によつて、之を實行して貰ひたい。(山本)

太陽黑點相對數報告 (1943年五月) Sun-Spot Relative Nos., May, 1943.

觀測者 Obs. (觀測地)	秋澤昭二郎 (高知市)	赤坂陽 (東京市)	大久保正 (東京市)	恒岡美和 (姫路市)	藤吉泰男 (福岡市)	保積善太郎 (東京市)	竹内潤 (名古屋)	青木章 (大阪市)	吉野昭三 (大阪市)	植田耕作 (大阪市)	疋田源一 (大阪市)	沓掛七二 (長野縣)	西山峰雄 (福岡市)	坂上務 (福岡市)	木邊成麿 (滋賀縣)	山本一清 (田上)
	SA	AA	Oq	YT	YH	H _z	Tu	Ai	SY	KU	GH	Kk	MN	Su	Kb	Ym
口徑 mm	32	55	58	36	50	76	32	75	15	32	38	102	32	42	75	100
倍率 ×	54	50	64	60	44	64	50	64	75	60	65	75	45	64	60	50
方法	P	D	D	D	D	D	D	P	D	D	D		D	Ph	D	P
1	12	11		11	11	11	12	11	13	11	11	C	11	11	11	
2	12	12		12	M	14	16	13	M	11	12	14	12	M	13	
3	22	12		C	11	16		M	M	11	C	C	C	C	16	
4	22	11		C	11	12	14	11	16	11	C	C	M	R	C	
5	R	11		R	R	11		C	15	11	C	M	11	R	M	
6	33	11		11	11	11	12	11	17	11	M	M	11	12	11	
7	22	11		M	11	11	13	11	17	11	11	12	11	11	11	
8	34	11		0	11	11	13	11	15	23	M	M	11	11	11	
9	24	23		0	23	25	0	14	C	23	M	M	M	25	24	
10	23	M		0	0	0	0	M	0	0	M	18	0	12	11	
11	24	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0	
12	23	12		0	11	13	14	13	21	0	12	12	12	13	12	
13	25	M		C	13	13		C	C		C	C	C	12	R	C
14	33	12		12	13	14	17	13	23	12	13	M	M	14	16	
15	28	C		12	R	C	18	14	C	13	13	C	R	C	16	
16	R	R		R	R	R		R	C	C	R	C	R	R	R	
17	35	R		24	39	R	30	M	20	12	27	C	32	42	37	
18	28	C		29	25	12	31	C	51	12	33	44	C	C	43	
19	C	22	23	M	C	12		C	41	C	M	C	C	C	M	
20	18	R	R	11	11	R	16	13	36	11	M	C	15	C	23	
21	26	12	M	11	11	15	16	M	16	11	11	12	C	M	12	13
22	30	13	11	11	13	13	16	15	17	11	M	13	13	12	15	13
23	C	13	M	R	R	13		14	15	11	M	12	R	C	14	12
24	23	C	R	R	R	R		R	R	R	C	R	R	C	R	C
25	C	C	C	0	12	0		R	C	R	C	C	C	C	R	12
26	55	12	M	12	12	0	14	12	17	11	M	12	12	14	22	R
27	R	C	12	R	R	C		R	C	R	R	C	R	R	R	C
28	C	C	R	R	12	R		R	C	R	R	R	R	12	R	C
29	M	12	R	C	12	12		14	21	0	12	C	12	12	22	12
30	47	12	C	0	12	12		14	20	0	12	12	C		26	C
31	R	C	C	C	C	12		C	C	0	C	C	M		C	0
平均 Mean	27	12		9	13	11	14	12	20	9	15	14	12	15	17	
日數 Days	22	19	3	18	22	24	18	17	20	24	13	12	14	14	21	5

★流星課 METEORS (138) 課長 小楨孝二郎 (Koziro Komaki, President)

梅雨もあけて、夜毎に星空は美しくなる。いよいよ流星観測の好期に入る。七月の主な流星群は次の通りである。July meteors:

期 間	極大日	輻射点		附近の星	備 考
		α	δ		
七月22日～八月10日	七月28日	340°	-17°	水 瓶 δ	緩, 長, 顯著
七月25日～八月10日	七月27日	355	+59	カシオペア β	微光
七月25日～八月 8日	八月 1日	342	-33	南 魚 α	緩, 長
七月25日～八月10日	八月 4日	303	-40	山 羊 α	緩, 長
七月15日～八月20日	八月13日	45	+57	ペ ル セ γ	速, 痕, 顯著

八月1日が新月に當る爲、以上の五流星群中、最後のペルセ群を除けば、極大前後の観測は好都合である。ペルセ群の初期の観測も望ましい。七月～八月はこれらの流星群によつて、日々の流星数は著しく増加するが、これ以外の流星群の活動も相當にある筈である、この好期を逸することなく、課員は勿論、會員特に學生の方々の、流星を通じて科學する態度の錬成に努められむことを希望する。

× × × × ×

五月の水瓶 η 群は、海老原勇夫(東京)、岡泰造(大阪)、松本久儀(大阪)の諸氏の観測を受理したが、これらは筆者の観測とともに後日まとめて、詳細に發表する。外に2～3火球の報告があつた。就中、五月11日の晝間飛來の大火球は、稀有のものであるが、その経路の概略は天文急報第612號(六月15日號)に發表した通りである。(1943. VI. 10)

★彗 星 課 COMETS

1943a(アレント)彗星は本年三月29日0時7.7分(世界時)に、ベルギーのユクレ(Uccle)天文臺で、小遊星の観測家たる S. Arend 氏によつて発見された。その位置は“れうげん座”の北部(おほくま ϵ 星の南方)で、西南方へ進んでをり、光度は13等とのことである。これは恐らくホイブル彗星の寫眞観測中に発見されたものであらう。三月四月の頃にはこのアレント星と殆んど同じ位置に Whipple-Fedtke 彗星(1942f)が東南に向つて進んでゐるのである。アレント星の観測はまだ我が國では報告がない。

1943b(オテルマ)彗星は去る四月8日21時0分(世界時)にフィンランド國のトルク(Turku)天文臺で Oterma 女史によつて発見された。この位置は“をとめ座” η 星の北で、西北へ進んでをり、光度は15等である。オテルマ女史は、昨1942年に1942b(オテルマ)、1942d(第一シワスマン・ワハマン)、1942e(ステ

ファン・オテルマ)の三彗星を発見してゐる。今年のこのオテルマ星はまだ我が國では観測されてゐぬやうである。

1942f(ホイブル・フェトケ)彗星は昨年十二月12日に発見されて以來、ずつと観測がつづけられてゐる。一月には光度は4等級にも上り、カニンガム彗星(1940c=1941I)以來の肉眼星として北斗あたりの北天を賑はした。最近のものでは四月9日の廣瀬秀雄氏の寫眞観測が發表されてゐる。

第二ネウイミン(1927I)彗星は、既報(天界第259號、第260號)の如く今春歸來の豫定であるが、まだ発見の通知に接しない。今までに入手した要素によればその近日點通過の時刻は次の通りである(何れも世界時にて):

F. R. Cripps 氏の計算によれば 1943年四月27.8443日

G. Neujmin 氏の計算によれば 1943年四月28.54日

神田茂氏の計算によれば 1943年五月 1.540日

その他、発見の可能性のある週期彗星(天界第259號第24頁参照)にはダニエル彗星(1909IV=1937I)と、ダレスト彗星(1923II)とがあり、また、毎年観測されることで有名な第一シワスマン・ワハマン彗星(1925III=1941VIII)は今年も多分七八月頃から観測されるだらう。(18. 6. 1)

(追記) 六月13日に着いた I. A. U. 回報第941號(1943年三月16日附)によると、1942f(ホイブル・フェトケ)彗星はその発見(1942年十二月12日)より以前に20回以上も撮影されてゐる、と Shapley が H. A. C. 第642號(1942年十二月14日附)に書いてゐる由である。この報告を見ると、最も以前のは1942年十一月5日に、オク・リヂ出張所でホイブルが撮つたもので、その光度は12等級と観測されてゐる(発見光度は8等級)が、それよりも前の十月に撮したものには未だ像を認め得ない、とのことである。なほ十二月13日、14日にヤーキースでズンビースブルクが観測したところでは、長さ40'の尾が認められてゐる。

1942e(ステファン・オテルマ)彗星は発見後まもなく神田茂氏によつて1867I(ステファン)彗星と同定されたことは既に記した(天界260)が、I. A. U. でも、M. Ebell 氏が、この彗星の軌道が1867I及び1937I(ダニエル星)と似てゐる、と指示してゐる、のを採り上げて、ステファン星との同定に同意してゐる(I. A. U. 回報927)。この彗星は十二月中旬に9等級にも上つたが、その後減光し、二月1日の廣瀬秀雄氏の観測では11等半になつてゐる。(18. 6. 13—進)

日蝕寫眞の豫約頒布: 本年二月5日、北海道厚岸で木邊成麿氏撮影。説明書附。

四ツ切〔皆既〕1枚 2圓80錢(㊦共)

三枚一組〔コロナ(カビネ)、プロミネンス(カビネ)、蝕分90%(手札)] 1圓90錢(㊦共)